

「中国文字拉丁化」の理論について

——国語ローマ字に対する批判を中心として——

曾 徳 興

<目 次>

- 一、序文
- 二、中国ラテン化新文字の出現
- 三、中国文字ラテン化の意義と精神
- 四、国語ローマ字に対する批判
 - (一) 技術面での問題
 - (二) 本質の問題
 - (三) 国語統一のプロセスの問題
 - (四) 両者の相違点のまとめ
- 五、結論

一 序文

1931年「中国拉丁化新文字の原則と規則」が発表されてから、文字改革の問題について大きな論争を引き起した。この論争が1957年漢語拼音方案（中国現行のローマ字表記法）実施により自然に静まったが、25年間も続いたこの論争は中国の文字改革史に絢爛たる一ページを加えた。

「中国文字拉丁化と」は、中国語をラテン化（ローマ字化）にするという意味、つまりローマ字で以って漢字を完全に代替し、表音文字化へ進ませることである。しかし1931年「中国拉丁化新文字の原則と規則」が発表される三年前、即ち1928年には、「国語羅馬字」（国語ローマ字）方案が「注音字母」第二案としてすでに政府によって公布されていた。勿論両者ともラテン化文字であると解してもよい

「中国文字拉丁化」の理論について

が、混乱を避けるために学者の間では1931年のものを「ラテン化新文字」と称し、1928年のものを「国語ローマ字」と呼ぶことにしている。

「ラテン化新文字」と「国語ローマ字」は両者とも26個のローマ字を採用しているので、基本的な理論にはそれほど違わないと判断しがちだが、論争の中に両者の違いに関する問題点が意外に多く論ぜられ、両者の違いを技術面である子音、母音の問題から始め、四声論（声調論）、本質論へと展開して行くのであった。

又一方言を国語にする「国語ローマ字」に対する批判から「大衆語」の建設問題が提起され、つまり大衆語建設について(A)先ず標準の一元的な国語を選んで徐々に広げて行き、方言を次第に消滅させる方法を探るのか、又は(B)先ず大きい区域の方言の中から多元的な大衆語文を建設し、次第に集中して、一元的な国語にする方法をとるのか。言い換えれば、この論争は国語統一のプロセスのかかわりのある問題にまで発展したのである。

二 中国ラテン化新文字の出現

1931年「ラテン化新文字」が現われ、これは又中国文字改革の仕事を一層新しい発展の方向へ向けさせた⁽¹⁾。又このラテン化新文字の出現によってさまざまな文字改革に関する論争を引き起し、1931年から1957年前後まで戦争を挟んで四分の一世紀も延々と続いた文字改革論争はあまりにも有名であった⁽²⁾。

この事は1927年の時まで遡って見なければならぬが、1927年中国大革命が失敗した後、その時モスクワへ逃れた者が多い。したがって1928年に中国文字を根本的に改造する仕事がソ連で始まった。当時仕事に参加したのは呉玉章、瞿秋白等の諸氏であった。一年の研究を経、数回の草案を作り出し、最後に瞿秋白氏によって一冊の小冊にまとめられた。いわゆる「中国拉丁字母」（中国ラテン文字）である。当時ソ連極東にいた中国労働者は、ソ連の文盲退治の積極性を見て、漢字の難しさが自分等の文化水準を高めることを不可能にしている、としみじみ感じ、もし一種の簡単で学び易い新文字があればいい、ということを切望した。

「中国文字拉丁化」の理論について

1931年9月26日、ウラジオにいる中国の労働者は「中国新文字第一次代表大会」を開き、会場で呉玉章、林伯渠、蕭三、王湘宝等から新文字方案制定の起草者として選出された。緻密な検討を経、又今までの各種の方案を集めて研究した結果、方案を作成し、又大会にかけ、ようやく「中国文字ラテン化の原則と規則」が決議された。ここで中国ラテン化新文字が正式に誕生したわけである⁽³⁾。

三 中国文字ラテン化の意義と精神

「中国文字ラテン化」とは中国語をラテン化するという意味で、つまりローマ字で以って漢字を完全に代替し、表音文字化へ進ませることである。言うまでもなく土地の分離性からきた方言の多様性（全国541種類）⁽⁴⁾、漢字の難しさからきた文盲率の高さ（1930年の推定では平均文盲率80%以上）は中国の文字改革の特殊性をなすものである。文盲を退治するには中国文字を難しい漢字から易しいローマ字のような表音文字へと切り換えなければならない。これがいわゆる「中国文字ラテン化」の精神である。

「中国文字ラテン化原則」は13項目からなるものであるが、その重要点だけを選んで次のように10項目に縮め、その中からわれわれは「中国文字ラテン化理論」の意義と精神をもう一步進んで考察することができよう。

1. 中国の漢字は古代の封建社会の産物であるから、現時代にふさわしくないものである。
2. 象形文字を根本的に排除し、純粋な表音文字を以ってそれに代替しなければならない。
3. 真の通俗的、労働大衆的な文字を作らなければならない。
4. 現代科学の要求にこたえるような文字を採用しなければならない。
5. 国際化の意義を重視しなければならない。
6. 上述の目的に到達するには、ラテン文字（ローマ字）を採用し、漢字をラテン化する以外に方法がない。

「中国文字拉丁化」の理論について

7. ラテン化した中国文字と中国労働者大衆の話し言葉はただ単に政治的、科学的、技術的な思想を発表することが可能であるのみでなく、中国文字のラテン化があってこそ、又中国労働者大衆の話し言葉の書面的な文字形成があってこそ、彼らの言葉と文字の発展も可能である。
8. 中国各地の発音は大体次の五種類に分けることができる。
 - ①北方発音（北京語）
 - ②広東発音（広東語）
 - ③福建発音（アモイ語）
 - ④江浙一部分の発音
 - ⑤湖南及び江西一部分の発音
 これらの発音は皆彼らのそれぞれの異なる綴り方で各地の文化を発展させなければならない。
9. 中国の文字がラテン化してこそ始めて国際的、政治的、科学的及び技術的な術語が中国語の中に容易に入ってくるのである。
10. ラテン化の出発点は労働者生活の言葉に基いているから、中国方言を研究する仕事自体は、文化政治的な意味において一番大切なことである⁽⁵⁾。

四 国語ローマ字に対する批判

先ず1928年9月26日に政府によって布告された「国語ローマ字の音綴り法式」を見てみよう。

(一)子音

ㄅ	ㄆ	ㄇ	ㄊ	ㄋ	b	p	m	f	v*
ㄆ	ㄇ	ㄊ	ㄋ	ㄌ	d	t	n		l
ㄋ	ㄌ	ㄎ*	ㄍ		g	k	ng*	h	
ㄌ	ㄍ	ㄎ*	ㄊ		j	ch	gn*	sh	
ㄊ	ㄎ		ㄌ	ㄎ	j	ch		sh	r
ㄌ	ㄎ		ㄌ	ㄎ*	tz	ts		s	z
ㄌ	ㄎ	ㄌ			y	w	y(u)		

(二) 母音 (基本形式)

1. 口を開ける母音

y, a, o, e, è*, ai, ei, au, ou, an, en, ang, eng, ong, el

2. 口をそろえる母音

i, ia, io*, ie, iai, iau, iou, ian, in, iang, ing, iong

3. 口を小さくする母音

u, ua, uo, uai, uei, uan, uen, uang, ueng

4. 口を小さくして突き出す母音

iu, iue, iuan, iun

(三) 声調 (四声)

陰平: 1. “基本形” 式を用いる。例えば

(一声) hua 花, shan 山。象声字, 助詞等が含まれている。例えば ma 鳴,
aia 阿呀。

2. しかし子音は m, n, l, r であれば h を付け加える。例えば

mau→mahu 猫, la→lha 拉

陽平: 3. 口を開ける音が母音の後にあれば r を付け加える。例えば cha→

(二声) char 茶, tong→torng 同, pang→parng 旁。

4. 一字目の母音が i, u であれば y, w に変える。例えば chin→

chyn 琴, huang→hwang 黄, iuan→yuan 元。しかし i, u は全

母音である場合は yi, wu に変える。例えば pi→pyi 皮, hu→

hwu 胡, u→wu 呉

5. 子音は m, n, l, r であれば“基本形式”を用いる。例えば ren

人, min 民, lian 連

上声: 6. 単母音の場合は重複に書く。例えば chii 起, faan 反, eel 耳

(三声) 7. 複合母音の最初或いは最後の字母 i, u であれば e, o に変える。

例えば jia→jea 假

guan→goan 管

「中国文字拉丁化」の理論について

shiu→sheu 許

hai→hae 海

hau→hao 好

しかし頭を変えたら、尾を変えない。例えば、

niau→neau 鳥

guai→goai 拐

8. ei, ou, ie, uo 四つの複合母音は6条に従う。例えば meei 美,

koou 口, jiee 解, guoo 果

去声: 9. 一音節のうち最後の母音が -i, -u, -n, -ng, -l 或いは -(無) の
(四声) 場合各各 -y, -w, -nn, -ng, -ll 或いは -h に変える。例えば

tzai→tzay 在

yau→yaw 要

ban→bann 半

jeng→jeng 正

el→ell 二

chi→chih 器

<付記>

1. 官話区域内において、楊子江下流一帯に短促の音(入声)しかない。もし短促の音を表したい場合、-q という音節尾音を用いれば良い。例えば tieq 鉄, loq 洛。

2. ローマ字の v, x 二字は国音の綴りには用いられないが、ただ重複の字には x で代替することができる。例えば

pianpian→pianx (偏偏)

一字置きに重複する字には v で代替することができる。例えば

kann i kann→kann i v (看一看)

二字一緒に重複する字には vx で代替することができる。例えば

「中国文字拉丁化」の理論について

feyshin feyshin→feyshinvx (費心費心)

3. 南京, 杭州, 北平(北京)等新旧都市は皆舌卷音に富んでいる。国音もこれを採用し, その綴り方の原則は次のようである。

①音節尾音の i, n を省く。例えば

孩儿 (hair-erl)→harl

扇儿 (shann-erl)→shall

味儿 (wey-er)→well

②(y), i, in 三音には el を付け加える。その他は l を付け加える。例えば

絲儿 (sy-erl)→sel

今儿 (jin-erl)→jiel

魚儿 (yn-erl)→yuel

明儿 (ming-erl)→mingl

后儿 (how-erl)→howl

4. 国語ローマ字の原則に基いて各地の方言を綴ることができる。

①江蘇, 浙江省あたりには bh, dh, gh, dj, dz 等の濁り母音を持っている。例えば bhu 蒲, dji 其, dzy 慈

②西安には bf, pf 等の子音を持っている。例えば bfang 庄, pfu 初

③広州には m, p, t, k 等の音節尾音を持っている。例えば sam 三, lap 立, tzit 節, hork 学

5. もし欧文のように字母の名称を順々に読む場合は, 必ず次のように国音に従って読むべきである。

a(ア)	b(ㄅ古)	c(ム古)	d(ㄉ古)	e(ㄜ古)	f(ㄝ古)
g(ㄍ古)	h(ㄏ古)	i(ㄌ)	j(ㄗ)	k(ㄎ古)	l(ㄌ古)
m(ㄇ古)	n(ㄋ古)	o(ㄛ)	p(ㄆ古)	q(ㄑㄨ)	r(ㄖ)
s(ㄙ)	t(ㄊ古)	u(ㄨ)	v(ㄨㄛ古)	w(ㄨㄛ古)	x(ㄒㄨ)
y(ㄧ古)	z(ㄗ)				

「中国文字拉丁化」の理論について

次は1931年9月26日にソ連にいる華僑がウラジオで開いた中国新文字第一回代表大会において採択された“ラテン化新文字の（綴り方の）規則”を見てみよう。

(一)字母

中国の字母は、中国にあるすべての音に従って完全にローマ字を採用しているが、なるべく簡単明瞭化し、しかも沢山の符号を使用しないこと。たとえば符号を用いるにしても、必須のものに限るのである。

中国の幾つかの子音 (th, ch, sh, rh, ng) はローマ字の中には見当たらないので、幾つかの複合子音を用いなければならないが、正母音 (a, o, e, i, u, y) ならローマ字にはある。又中国は沢山の複合母音 (ai, ao, ei…) と鼻母音 (an, ang, en, eng…) を持っているが、これらはローマ字で綴ることができる。

これらの規定から次のように字母表を作成できたのである。

<字母表>

a	b	c	ch	d	e	f
g	i	j	k	l	m	n
ng	o	p	r	rh	s	sh
t	u	w	x	y	z	zh

字母の中には22個の子音を持っている。発音の部分の違いによって次のように並べることができる。

b	p	m	f	w
d	t	n	l	r
g	k	ng	x	
zh	ch	sh	rh	
z	c	s	j	

「中国文字拉丁化」の理論について

字母の中には6個の母音を持っているものがある。すなわち：

a o e i u y

又15個の複合母音を持っているものもある。すなわち：

ai ao ou ia iao ie iu ua uo ui ei yo ye uai iou

又15個の鼻母音を持っているものもある。すなわち：

an ang en eng in ing un ung ian iang uang yn yng yan

(二)綴り合せの規則

1. g, k, x は a, o, e, u の前にある時は硬音で発音するが, i, y の前にあると軟音に変わる。例えば

几个 gigo, 喜欢 xixuan, 起来 kilai, 居 gy, 許 xy

2. j は i と y の半母音である。w は u の半母音である, これらは音段を分割するために用いられるものである。もし前の音段と後の音段が接続し, しかも後の音段の最初の文字は i, y, u の場合は, i を ji に, y を jy に, u を wu に変えて行く。例えば

原因 yarin→yanjin

关于 guany→guanji

队伍 duiu→duiwu

もし後の音段の最初の文字は a, o, e の場合は, この二つの音段の間に「'」という符号を付け加える。例えば

平安 pingan→ping'an

皮袄 piao→pi'ao

3. 中国語は八つの子音 (z, c, s, r, zh, ch, sh, rh) を持っている。それらには一つの特別な母音が含まれている。故に母音と組合せなくても一つの音段として成り立ち, 又は一つの詞 (単音節又は複音節の単語) として単独に成り立つのである。例えば

ル子 rhz, 字 z, 次 c, 四 s, 二 r, 紙 zh, 吃 ch, 是 sh, 日 rh

4. 「四声」の区別は極めて必要なものと極めて混同し易いものだけを保留す

る。たとえば

买 maai (三声) 卖 mai (四声)
哪儿? naar? (三声) 那儿 nar (四声)
等ごくわずかなものしか保留されない⁽⁷⁾。

以上「国語ローマ字」と「ラテン化新文字」の両方案を見てきたが、両方案を比較してみて、これから技術面、本質面、又は国語統一のプロセス面での違いを一々究明して行くことにする。

(一) 技術面での問題

I, 子音について

1. 北京語の“ㄆ”は明らかに英語の“h”ではない。“ㄆ”は舌の根本の摩擦音であり、ラテン化新文字はxで表わしている。これは合理的だけではなく、zh, ch 等と混乱を防ぐようにもなる。国語ローマ字のhは四種類の使い道がある。：①「ㄆ」を表わす。② ch の中に用いられ「ㄑ, ㄒ」を表わす。③ m, n, l, r 等の陰平（第一声）を表わす。④去声（第四声）を表す。これがために混乱を起し易い。どうしてxを使用しないで英語の喉音hを追随するか？ 話によると習慣に合わせるためである。しかしこの習慣は文盲大衆にはもっていないはずである⁽⁸⁾。（現行の拼音字母はhを使用している）
2. 国語ローマ字の子音の中に単純子音は、hを除けば問題ないが、複合子音（tz=ㄗ, ts=ㄘ, j=ㄑ, ch=ㄒ, sh=ㄕ）だと発音学的な理論と英文の習慣にこだわりすぎるふしがあるから、j(ㄑ), ch(ㄒ), sh(ㄕ), tz(ㄗ), ts(ㄘ)等の配合は整っていない。非常に体系化されていない。例えば ts(ㄘ), 特に tz(ㄗ) は中国語では 常に使われている音である。たとえこれらの子音は音韻学の理論で言えば複合的なもの（t+s と t+z の混合音）であっても、中国字母表（アルファベット表）の中には各自に一つのローマ字を採ってそれを表わすことができる。字母表は数億の人々に使わせるために備えるものであるから、必ずしも完全に学問的な原理に沿わなくてもいいと思う⁽⁹⁾。

「中国文字拉丁化」の理論について

中国普通話⁽¹⁰⁾の読音は北方音に基いたものであるから、北方音の中には四つの舌巻く音⁽¹¹⁾出, 戸, 日, を用いる個所が非常に多い。これは北方民族の影響であり、中国古文の中にはないものである。中国南方楊子江流域、特に江浙及び福建、広東あたりでは、この種の舌巻音は殆んど発達していない。完全になとも言えるほどである。したがって普通話の中で、この種の子音が南方の人にとって学び易くするためには、できれば次のように系統的に並べた方がよいと思う⁽¹²⁾。

z (ㄗ)	舌を巻かない	zh (ㄓ)	舌を巻く
c (ㄘ)	〃	ch (ㄔ)	〃
s (ㄙ)	〃	sh (ㄕ)	〃
j (ㄐ)	〃	jh (ㄑ)	〃

ラテン化新文字は勿論上述のような理論に立脚して作られたものであるから、「舌を巻く音」と「舌を巻かない音」との区別がつけ易いのである。例えば

zh ch sh rh
z c s j

そのほかに子音も単独に発音することができる。例えば漢字の中の「文字」二つの文字を見ると、国語ローマ字だと wen tzyh と綴らなければならないが、ラテン化新文字だと wenz だけで済む。又例えば、「世界」について、国語ローマ字だと shijieh, ラテン化新文字だと shgie で表記され、一層簡単になる⁽¹³⁾。

Ⅱ、母音について

中国語音の中には、単純母音以外に複合母音（二重母音とも言う）の書き方もあるわけで、しかも複合母音は非常に多く使用されている。複合母音をローマ字で書けば次のように分けられよう。

- a. 鼻母音：an (ㄢ), ang (ㄤ), en (ㄣ), eng (ㄥ), in (ㄣ), ing (ㄥ),

「中国文字拉丁化」の理論について

un (ㄣ), ueng, ong (ㄨㄥ)

b. 二つの複合母音 : ai (ㄞ), ei (ㄟ), au (ㄠ), ou (ㄡ)

c. 三つの複合母音 : iou (ㄟㄠ), iao (ㄠㄠ), uai (ㄠㄠ)

d. 一つの母音と一つの鼻母音と複合したもの : ian (ㄞㄢ), uan (ㄠㄢ),
uang (ㄠㄨㄥ)

e. 二つの母音と一つの鼻母音と複合したもの : iuan (ㄟㄠㄢ)

これらは勿論非常に複雑なものであるが、しかしその中に含まれている幾つかの母音を一つのように早く読めば正確な発音が得られるわけである。

国語ローマ字が規定した母音の中で、幾つかの欠点が見られる。

1. a, o, i, u については問題ないが、「e」だと非常に不合理な読方になる。

le=勒、ここでの e は「厄」という音であるが、もしこのような読み方に従えば sheu は「什鳥」の合併音にならざるを得ない。しかし国語ローマ字の中には sheu を「許」と読むので、この「e」は一体「厄」の音であるのか、又は「衣」の音であるのか？ 定かではない⁽¹⁴⁾。

2. 「y」の読音は一番疑問に思う。国語ローマ字の y は

①半母音の i である：

例えば i=依

yi=移

②又は母音でもある：「i」の陽平（第二声）例えば，chyn=琴

③又は知，癡，詩，日，玆，此，四の母音でもある：

例えば，chy=癡

shy=詩

ラテン化新文字では y は i しか発音しないので、国語ローマ字よりも簡単明瞭である。

3. 国語ローマ字の「el」は「儿」(ar)の音であり、又「二」(ar)の音でもある。これは舌卷母音⁽¹⁵⁾である。ラテン化新文字は簡単且つ便利を求めるために母音を省略して、r で表わしている。しかし国語ローマ字は母音を保存

「中国文字拉丁化」の理論について

し、el で表わしているが、人々はこの el を見て舌卷母音として読むことにためらうだろう⁽¹⁶⁾。

Ⅲ、声調（四声）について

技術面での問題の中でこの声調について上述した子音や母音よりも多く論じられている。多くの学者がラテン化新文字と国語ローマ字の違いをこの“声調”つまり“四声”に求めている。なぜならば国語ローマ字は四声を文字の中に取り込んでいる。つまり声調が変われば文字の綴りも変わってくる。これが国語ローマ字の特徴をなしたわけである。ラテン化新文字は四声を完全に無視したところにその特殊性を強調している。両者の論争はいわゆる“四声論”まで発展したのである。

中国の「平上去入」の声調は地方によって異なる。北京の四声、江浙の七声八声、閩南の七声、広東の九声……等さまざまであり、勿論皆異なる文字で表現できるが、しかし国語ローマ字のように声調を文字の中に組み入れるまでは必要がないと思う。実際言えば、古文を読むときの四声——「康熙字典」の中にも注記されている四声は読書の調子だけであり、言葉の声調ではない。又言葉を話す時、複音節の字が発達しているため、個々の漢字の声調は比較的にはっきりしない。いろいろな声調が互に変化し、しかも多くのものがいわゆる「轻声」（平上去入の普通声にはかまわず）によって行く。

したがって現在中国の白話（口語）の中にある声調は「特別な重音」に過ぎない。即ち「音節内部のアクセント」であるから、表音文字のつづり方の中に取り入れられると、その表示の仕方が非常に難しくなる。要するに文字又は五線譜で表示する声調は⁽¹⁷⁾、大学内において音韻学で研究する分野にすぎない、通常の文字の中に取り入れて数億の人々に応用させることはできない。例えば漢字の「一」という字の読方は、数字の後或いはセンテンスの後には陰平（第一声）と読む。つまり「衣」と同じ発音である。陰平（第一声）、陽平（第二声）、上声（第三声）の前だと去声（第四声）と読む。つまり「意」と同じ発音である。去

声（第四声）の前だと陽平（第二声）と読む。つまり「移」と同じ発音である。このように「一」の字だけでも声調面において三つの読み方があるわけである。「不」という字も同じ複数の読み方がある⁽¹⁸⁾。その他の字、特に上声の字とほかの字と一緒に一つの単語（辞）になった場合、ほとんどその原来の声調を変えるのである⁽¹⁹⁾。このような状態だと声調を表音文字の綴り方の中で完全に表わすことができるであろうか？ たとえ、できたとしても、このように書き下した文字は非常に複雑で読みづらいものになるのである⁽²⁰⁾。

声調を表記することは、確かに同音字を減少する効果がある。しかしもし同音字の問題を解決するならば、四声だけに分けるのでは足りない。なぜならば、国語ローマ字の中でも数多く同音又は同調の字を区別することはできないからである。例えば、剣と箭（同音同調）、主義と主意（同音同調）……等がそれである。国語ローマ字の中において、二人の同音同調の苗字が出た場合、彼らの郡名の最初のローマ字を後につけ加え、これを以って区別する。もし郡名が同じである場合、一人は郡名の最初のローマ字を用い、もう一人は郡名の二つ目のローマ字を用いる。これがなぜ国語ローマ字論者が自分の名前を書く時は、必ず「百家姓」に頼らざるを得ない原因がわかるだろう⁽²¹⁾。

大都会の中、普通話を話している人々の中、又はある程度の教育を受けた人々の中において、「四声」はそれほど重要なものではない、A地域の四声は必ずしもB地域の四声と相合わず、しかしながらA、B両地域の人々は、四声の不一致のために、話しが通じないことはない。大学或いは高校、中学の教室の中で、教師は必ずしも純粋な「国語」を使っているわけでもないし、学生も必ずしも全員が「四声」を区別することができるとは限らない。しかし彼ら（教師と学生）は四声の問題で「教え」又は「学び」には支障を来たすこともない⁽²²⁾。

言語が多音化に向けて発展している過程において、四声はその重要性を失いつつあるのみならず、同時に人民の生活の変化、人民の文化水準の上昇の過程においてもその重要性を失いつつあるのである⁽²³⁾。

言うまでもなくラテン化新文字は声調を取り入れないものであるから、同音字

「中国文字拉丁化」の理論について

は確かに国語ローマよりも多く存在するものである。もし単なる同音字の数で判断すればラテン化新文字は漢字に絶対に及ばないばかりか、声調を表記する国語ローマ字にも及ばない。なぜならば、国語ローマ字はたとえ同音字の問題を解決することができないとしても、同音字の数はラテン化新文字そのものよりも少ないからである。この論点に立脚して、われわれは「同音字があまりにも多すぎることはラテン化新文字の欠点である」と言えよう。少なくともラテン化新文字は同音字を減少するために別な方法を考え出していない限り、この論断は成立すると思う⁽²⁴⁾。

ここでわれわれは次のようなことを見出すことができよう。つまり同音字の問題を解決するため、ラテン化新文字と同語ローマ字が完全に違う方法を探っていること。国語ローマ字論者は声調をたよりに同音字を区別することは唯一の方法であり、少なくとも主要な方法であることを信じている。これに対してラテン化新文字論者は声調の表記を以ってして同音字を区別するのは一番悪い、且つ一番不合理な方法であると信じているから、彼らは四声を表記することに反対し、同時に声調に依頼する以外の方法をとることを主張したわけである⁽²⁶⁾。

言葉は生きているものであり、四声は死んでいるものである。生きている言葉の中において、四声は最上の規範として守られていない。先生の「生」は第一声であるが常に「先聖」と読まれ、第四声になる。東西の「西」は第一声であるが、常に「東洗」と読まれ、第三声になる。「桌子、椅子」は「桌字、椅字」に読まれ、「稍微」は「焼微」と読まれている……このように枚挙にいとまがない。又軽声のない地域はそれを第一声又はほかの声に読まれているものもある⁽²⁷⁾。

六朝以前の詩は、四声を滅多に考慮しなかった。唐時代の「律詩」⁽²⁸⁾と「絶句」⁽²⁹⁾によりやく厳格な四声の規則がもたれるようになった。しかし「韻脚」⁽³⁰⁾を除けば「平仄」⁽³¹⁾二声しか考慮に入れず、ある常用の字、聽、看、応、教、論等の種類の字だと平声にもなるし、仄声にもなる。韻書の本を開いて見れば、沢山の四声の字が現在口頭でしゃべられている言葉とは一致しない。ここでわれわれはたとえ字典と韻書がいくら四声で規定しても、生きている言葉は常にこの束

「中国文字拉丁化」の理論について

縛から逃げ出そうとしていることを知ることができよう⁽³²⁾。

故にラテン化新文字論者から見れば、声調の表記で同音字を区別する方法は得るものよりも失うものが多い。確かに声調は中国語の特徴ではあるが、しかし特徴というものは不変なものではない。象形はかつて中国文字の特徴であったが、この特徴も現在の四角い字の中においてその形跡は少ししか残されていない。この部分もいつの間にか捨てられる運命になるであろう。単音節もかつて中国語の特徴であったが、この特徴も一日一日と消えつつあるのが目に見える。というのは複音節の語調がたえまなく増加しつつあるからである。

中国語の声調は一番古いのは9声であったが、次第に消えて4声になった。現在この4声も又死滅しつつある。例えば、あるところでは第一声はもう区別しにくくなってしまった。幾らかの複音節字の中にも声調を失った現象が見られ、いわゆる軽声字がたえまなく現われてきている。したがってこの「特徴」という名義を以ってしても表音文字の中にいずれは死滅するであろう声調を保存していくところに理論を求めることは納得し難い⁽³³⁾。

正直に言えば、国語ローマ字は初期の各式方案（「切音」「官話」「簡字」「注音字母」「教会羅馬字」）よりももっと完全であり、合理的である。しかしこの運動が終始展開できなかった主要な原因は①彼らは各地において“国語ローマ字の字母”を切実に広めていかなかった。②四声の表記はそれを非常に難しい文字にしたというところにあると思う。特に四声表記は確かに同音字を減少する効果をもたらすが、ところがそれは覚えるのが非常に難しいため深く民間まで浸透しなかった。双方を相殺した結果、得ることよりも失う方が多い。もしこの欠点がなければ、今日、国語ローマ字はもうすでに一般的に使われていて、中国文字の改造はもうすでに歴史の古跡になり、現今の任務ではなかったかも知れない⁽³⁴⁾。

(二) 本質の問題

ラテン化新文字と国語ローマ字は、本質的な面では、はっきりした違いがある。これは両者の主要な効用（機能）を見るとわかる。

「中国文字拉丁化」の理論について

ラテン化新文字と国語ローマ字は、両者ともローマ字を利用しているが、本質的に両者には大きな違いがある。国語ローマ字は漢字を注音（ふりがな）するために作ったものである。ラテン化新文字は文盲を退治するために作ったものである。国語ローマ字の第一効用はウェード式⁽³⁵⁾を追い出して、必要とする国際化の人名、地名のために注音する。ラテン化新文字のねらいは一日も早く文盲の数を減らそうとしているところにある。国語ローマ字は注音を主な仕事として選んだからには、自然的に色々な顔でその数万の漢字に適応しなければならない。漢字は死んでいるものであり、固定した読音と声調をもっているから、国語ローマ字も一々そのために区別しなければならない。国語ローマ字は一旦この道を行んだ以上、方案を繁雑化の方向へ向けざるをえない。「以簡駁繁，稍習即通」（簡単な方法で繁雑に対処し，ちょっと学べばすぐできる）という音綴りの方法を放棄して，人々に400余りの意味のない音段（文盲にとって），130余りの子音と母音の組合せ（知識人にとって）を学んでもらうわけである。その結果は，表音文字を以って文盲を退治する方法はとうとう否定されてしまった。知識人さえも敬遠するくらいであるから，西欧人が興味を持たないのも当たり前だろう。これこそ国語ローマ字が失敗した内在的原因である⁽³⁶⁾。

ラテン化新文字は国語ローマ字とは違って，死んでいる書面文字（漢字）を完全に捨てて，生きている口語を書面化することを手段とする。これはすべての人々（話せる人なら）に短期間に書面語を獲得させることができ，しかも別な語言を学ぶ苦痛を味わなくて済むのである⁽³⁷⁾。

（三）国語統一のプロセスの問題

国語ローマ字は注音字母に基いて北京音を標準にして作ったもので「標準国音」と呼ばれている。この理由は，各国はほとんど一つの方言を採用して国語にしている。この方言は次第にその他のすべての方言に打ち勝って行くであろうという理論に立脚している⁽³⁸⁾。

この理論は事実上あまり通らないものである。各国の国語は勿論ほとんど一つ

の方言を基礎にしているが、事実上その他の方言の影響を受けている。読音の面において、又文法部分の変化の面においても、すべてこれらの影響を受けた形跡がある。中国においては、この状態はもっとひどいと思う。一つの方言が全国の「普通話」として成り立つ資格は、言うまでもなく、この方言の地域は必ず真の経済的、文化的中心地であると同時に政治的な中心地でもあること。中国では残念ながらこのような中心地はまだ見当らない。北京は以前政治的な中心地であったが、³⁹経済的、文化的な中心地ではなかった。清朝数百年の間に使用されていた言葉を考察して見ると、話し言葉は勿論北京語を官話と見なしているが、文学的言語だと、すごく混沌たる「江南話」⁽³⁹⁾の読音を「官音」としている。例えば、文章、詩詞の中の「平上去入」(声調)と「韻脚」(詩賦の句末に用いる韻字)はすべて江南音を標準としている。現在(1930年代)北京は政治的な中心地の資格さえ失ってしまった。ここ数十年、すべての新しい研究、学術に使われている言葉、工商業発展の中で使われている技術上の言葉、政治上、社会交際上の言葉……等、事実上大半は南部の人(江、浙、贛、粵、湘、鄂、川……等の人⁽⁴⁰⁾)の口から出されたものである。同時にこれらの地域には歴史のある古い中心都市が一つもなかったから、北京語を学ぶ以外に方法がない。結果的には、「藍青官話」(似て非なる官話)から実際的な普通話になるだろう。例えば、大学は北京にあるが、しかし北京大学の教授、学生達は90%以上「藍青官話」しかできない。北京以外の人には北京語を話せないのは当たり前のことだ。工場の中、市場、会議場……等で、ほとんどの人が純粋な北京語を話せない。このような状態の下で、もし綴り方が完全に北京の読音、北京語調に従ったら、これは極めて大多数の人にとってはすごく重い負担になると思う。

以上国語ローマ字の「国語統一に関するプロセスの理論」をラテン化新文字の立場で見えてきたが、次は中国語ラテン化を擁護している魯迅の論文を引用して、そこからラテン化新文字論者の大衆語建設問題に対する見解、つまり国語統一のプロセスの理論を一瞥することにしよう。「漢字と大衆はどうあっても両者が並び立つことはありえない。したがって大衆語⁽⁴¹⁾の普及につとめるならば、必ず

「中国文字拉丁化」の理論について

ローマ字の表音文字を用いる(つまりラテン化する)こと、しかも幾つかの区に分けて、区ごとに小区に分ける。(例えば紹興の地区だけでも4小区に分けられる)、作文の初期には、その地方の純粋な方言を用いること、しかし人間は進歩を求めているもので、その時になれば、もともと使った方言が必ず足りなくなると思う。そうすれば、白話、西欧文字、又は文法を用いることになる。但し交通が発達し、言葉が混雑しているところにおいては、もう一種の語文があるはずだ。それは比較的にある普通なものであり、もうすでに新しい語彙を採用しているし、これはいわゆる大衆語のひな形である。その語彙と文法は田舎まで輸入することができる。中国人は将来においてどうしても数種類の中国語をマスターしなければならない運命にある。このことは教育と交通によって成し遂げることができよう⁽⁴²⁾。」

前にも述べたようにラテン化新文字はソ連にいる中国人労働者のために作られたものである。ソ連にいる華僑は山東人が一番多く占めているため、ラテン化新文字は山東、河北、東北一帯の北方方言で標準にしたものであるが、その目的はその地方の大衆に一種の「筆頭語」(書ける言葉)を与えるだけであり、強制的に全国にそれを普通話にするものではない。中国文字ラテン化委員会の意見によると、中国は全国を5〜7の方言区に区分することができるし、各区の方言をすべてラテン化にして各地の文盲を退治する⁽⁴³⁾。換言すれば国語統一について、先ず大きい区の方言の中から多元的な大衆語文を建設し、次第に集中して、一元的な国語にする方法を採用するのである。

(四) 両者の相異点のまとめ

以上国語ローマ字に対する批判の論争の中から「中国文字ラテン化の理論」を考察してきたが、「国語ローマ字」と「ラテン化新文字」との相異点を次のようにまとめることができよう。

中国語の中では「同音異義」の字が多すぎる(漢字は形体が違うから、目で見ると場合には混乱を起さない。例えば“买”と“賣”又は“埋”は三者とも形が違うが、音声面だと全部同じである)。一般の人民大衆の言葉は、すべて各種の方

「中国文字拉丁化」の理論について

言“音系”の中の“声調”によって、これらの同音異義の字を区別するのである。国語ローマ字はこれらの同音字の困難を克服するために、「変体定型」の方式を用い、文字を増やしたり、或いは変えたりしてその綴り方で異なる声調を表す。例えば、「埋」を mai, 「买」を mae, 「卖」を may にし、又「梨」を li, 「李」を lii, 「厉」を lih にする。しかしラテン化新文字はそれはあまりにもめんどろで、綴りも長すぎると嫌がっているので、声調にこだわらないで、「詞儿連写」（詞の続書き、つまり二音節以上の単語を一緒にくっついて書くということ）で以って同音字の困難を克服するのである。例えば, womn dao zheli lai dushu（我们到这里来读书）我们，这里，读书を各々一緒にくっつける。これが技術面に関する双方の論争の焦点である⁽⁴⁴⁾。

国語統一のプロセスの問題に関しては、国語ローマ字論者は先ず一種の標準方言（北京語）の文字を精製し、漢字を確実に且つ完全に代替して全国に広げようとしている。この表音文字から漢字が全国に残した固有の統一性を高め、知識階級と労働大衆が文字運用上の不一致と混乱を防ぐことができよう。ラテン化新文字論者はこの政策に反対し、新文字は各大区域の方言を大体表すことさえできれば良いと主張し、独立であり、不統一である色々な新文字を避ける必要はない。なぜならば近い将来において、自然的に互いに溶け合って大衆語になり、一種の統一した新文字を築き上げるであろう。この国語統一のプロセスの問題に関して両者は大きく対立し、国語ローマ字論者は相手を「自ら時代遅れ者の見解に陥った」と嘲笑っているが、これに対して、ラテン化新文字論者は相手を「小資産階級的な雰囲気があふれている」と叱り責め返している⁽⁴⁵⁾。

五 結 論

以上1931年「中国文字拉丁化原則と規則」の発表から1957年「漢語拼音方案」の発表まで約25年間の“中国文字ラテン化論争”を整理してきたが、われわれは中国文字ラテン化理論（国語ローマ字とラテン化新文字）の中から二つの問題点

「中国文字拉丁化」の理論について

を見出すことができよう。一つは同音字問題であり、もう一つは語文統一の問題である。

同音字の問題については、これは表音文字（ラテン化文字＝ローマ字）の宿命である。表音文字で以って膨大な漢字の同音字問題を解決する試み（四声を文字の中に組み入れたり、又は詞の続書きしたりする方法）は未だに成功の萌が見られない。今日に至っても依然として巨大な重荷を抱えているままにしている。というのは、視覚上で同音字を区別するには「漢字」より良い道具は未だに見当たらないからである。

語文統一の問題については、不統一の表音文字（方言又は遠い将来大衆語まで発展する期待文字⁽⁶⁾）は国語の統一を促進することができるが、統一性を持つ「漢字」が却って統一する機能を持たないという論断に対して、人々は理解に苦しむだろう。

いずれにしても現時点において、中国では“ローマ字の発音表記法”を用いて文盲を退治しようとしているし、“北京語”（一方言）を以って国語の統一を図っている。勿論文字ラテン化（ローマ字化）へ持って行く意欲が十分見られるが、しかし一般大衆が三千年の歴史を有する「漢字」に対する愛着心は並々ならぬものがあるから、今にしても、ローマ字は「漢字」の注音（ふりかな）の役割しか果たしていない。言い換えれば文字改革問題について、“漢字をどうするか？”つまり「漢字の処遇」の問題が一番大きな課題になるのではないかと思う。

注

- (1) 丁易著、「中国文字与中国社会」p. 90.
- (2) 日中戦争中、大部分の論争文集が戦火によって焼かれたことを非常に残念に思う。
- (3) 丁易著、前掲書、p. 90. 又は中央学院大学論叢第14巻第1号（1980年6月）、p. 69, 70 拙著「中国語の発音表記法に関する若干の問題点」
- (4) 中国語学研究会編、「中国語概論」p. 117.
- (5) 周有光著、「漢字改革概論」p. 76, 77, 78.
- (6) 周有光著、前掲書、p. 71, 72, 73, 74.
- (7) 周有光著、前掲書、p. 78, 79, 80.

「中国文字拉丁化」の理論について

- (8) 拉丁化出版社編訳部編,「中国文字拉丁化文献」p. 82.
- (9) 倪海曙編,「中国語文的新生」p. 37.
- (10) 北京語を基礎方言とし,北京語音を標準音とし,典型的な現代口語文による作品を語法の規範とする漢民族の共通語。
- (11) 拙著,「最新中国語会話基本句型」(基礎編)p. 12.
- (12) 倪海曙編,前掲書,p. 37.
- (13) 倪海曙編,前掲書,p. 82.
- (14) 倪海曙編,前掲書,p. 39, 40.
- (15) 拙著,「最新中国語会話基本句型」,p. 9.
- (16) 拉丁化出版社編訳部編,前掲書,p. 83.
- (17) 拙著,前掲書,p. 13.
- (18) 拙著,前掲書,p. 15.
- (19) 拙著,前掲書,p. 14.
- (20) 拉丁化出版社編訳部編,前掲書,p. 78.
- (21) 拉丁化出版社編訳部編,前掲書,p. 78, 79.
- (22) 倪海曙編,前掲書,p. 217.
- (23) 倪海曙編,前掲書,p. 217.
- (24) 拉丁化出版社編訳部編,前掲書,p. 77.
- (25) 拉丁化出版社編訳部編,前掲書,p. 77, 78.
- (26) 拉丁化出版社編訳部編,前掲書,p. 78.
- (27) 倪海曙編,前掲書,p. 218.
- (28) 漢詩の一種の体,古体詩に対する新詩体(近体詩)をいう。律詩には五言詩と七言詩とある。八句より成り古体詩に比し格律が厳格である。
- (29) 「截句」に同じ,「今体詩」の一種で四句よりなるものを言う。一句が五字よりなるものを「五言絶句」,七字よりなるもので「七言絶句」という,
- (30) 一音節の後半部すなわち母音の部であり,詩賦の句末によく用いる韻字,
- (31) 漢字の声調には平・上・去・入の四声があり,平声は上平・下平に分かれており,これを平といい,上・去・入の三声を仄という,すなわち漢字の声調は平らな調子の平とそれ以外の調子の仄に区別される。
- (32) 倪海曙編,前掲書,p. 218.
- (33) 拉丁化出版社編訳部編,前掲書,p. 78.
- (34) 拉丁化出版社編訳部編,前掲書,p. 80.
- (35) 中央学院大学論叢第14巻第一号(1980年6月),p. 78.
- (36) 拉丁北出版社編訳部編,前掲書,p. 81, 82.

「中国文字拉丁化」の理論について

- (37) 倪海曙編, 前掲書, p. 73.
(38) 倪海曙編, 前掲書, p. 41.
(39) 楊子江下流南岸の江蘇省一帯の地方の言葉をいう。
(40) 江は江蘇省の略称,
 浙〃浙江省 〃
 贛〃江西省 〃
 粵〃広東省 〃
 湘〃湖南省 〃
 鄂〃湖北省 〃
 川〃四川省 〃
(41) 大衆語は「大衆の意識を代表する」言葉であると解釈すべきである。ここでいわゆる大衆は広義で言えば勿論国民全体を意味するが, しかし一番主要な構成分子は全人民の80%以上を占めている農民及び手工業者, 新式産業労働者, 小商人, 店員, 小売業者……等である。(申報“自由談”1934. 6. 18)

大衆語と五四時代のいわゆる「白話文」との異なる点は, 白話文は必ずしも大衆意識を代表するものではないというところにある。(申報“自由談”1934. 6. 23)

今までの白話文は文言文よりも大衆に近寄ってきたとはいえ, しかし事実上これは明らかにまたものりないものである。今の白話文学はただ単に知識分子とその階層のものに過ぎない。まだ普遍的な大衆が必要としているものではない。なぜならば, 簡単に言えば, この種の白話は大衆の言葉ではないからである。ここでいわゆる大衆語は, 大衆が話せる, 聴いてわかる, 見てわかる言葉文字である。(“語文論戰的現階段”文逸備著普, p. 151)

* 大衆語と普通話とは又違う意味合いを持っている。

- (42) 拉丁化出版編訳部編, 前掲書, p. 121.
(43) 倪海曙編, 前掲書, p. 41, 42.
(44) 黎錦熙著, 「文字改革論叢」p. 8, 9.
(45) 黎錦熙著, 「文字改革論叢」p. 9.
(46) 期待文字は私が勝手につけた名称である。文字ラテン化論者の考えは, 大衆語は交通の頻繁により自然的にできる言葉であるが, 数十年, 数世紀の時間がかかるかも知れないという意味合からその名をとったものである。